

小松善雄教授記念号によせて

小松善雄先生は2008年の3月に本学を定年退職されました。先生がこれまで経済学部において果たしてこられた大きな功績に感謝し、経済学研究会はここに『立教経済学研究』の月号を「小松善雄教授記念号」として刊行いたします。

小松先生は、東京農業大学生物産業学部より2000年4月に本学に教授として赴任されてから2008年3月まで8年の間、文字通り幅広くご活躍なされました。学部では「経済原論A」を担当され、その博識をもって学生に経済現象の原理的な考察の大切さを教えて下さいました。また企画講座を担当されたときにはキャンパスを飛び出して、学生諸君を地域の活性化という現場の難題に向き合わせる実践的な教育活動を推進されました。これは、本学が大学祭やイベント以外に、教育研究機関として地元豊島区・池袋に開かれたものとなるための大きなステップでありました。

小松先生は、1974年に本学大学院経済学研究科博士課程に入学され、1978年から3年間は経済学部助手として勤務されましたが、すでにそれ以前に雑誌『賃金と社会保障』の編集長という経歴をおもちでした。また助手任期終了後には、国民経済研究協会で東京都の地場産業を中心とした実態調査に携わっておられましたので、現場に明るい研究者でありました。

しかし先生のご研究は、第一にマルクス経済学とマルクス主義の発展のために向けられました。恐慌・信用論を中心とする理論研究は、机上の理論ではなく資本主義の実態を解明するためのツールとして行われ、原典解釈の厳密さをもって世界に知られた久留間鮫造氏の演習への参加も、現状分析への確かな関心に裏打ちされてのことでした。そのため、様々な係争点について小松先生が示された見解は、原典にたちもどっての整合性と現実妥当性を追求するものであり、それがレーニン批判になったり、主流的見解への異説となっても小松先生はたじろくことがありませんでした。

先生のレーニン研究は、全集の全文言精査のうえに国家資本・国家独占の概念を掘り下げて再規定し、併せて戦後日本の景気循環を実証的に吟味して固定資本の償却期間に規定された周期性を読み取り、現状を理論的に把握する国家独占資本主義論としてまとめられました。この研究『国家独占資本主義の基礎構造』により小松先生は、1985年に本学から経済学博士の学位を授与されております。

こうした問題関心からする研究を継続しつつ、小松先生は、ご自身に関わりのある地域の振興に関与され、産業界・行政・研究者の共同作業に積極的に参加されております。なかでも北海道網走市におけるご活躍は特筆すべきであり、かの地で教育・産業・行政の幅広い分野にわ

たって精力的な活動を展開してこられました。古典文献の内在的解読，全経済構造の動態的把握，そして社会諸分野の諸問題への改良策模索，これらを結びつけていることが小松先生の研究スタイル，いや，小松善雄氏の生き方なのであります。それはひとえに，人々が人間らしい生き方のできる社会の希求という熱い想いの現れでありましょう。それゆえ，変動止むなき世界の諸現象を前にしては，部分現象のどんなもっともらしい説明（理論）も先生にはドグマとはなりません。

この姿勢は，先生のもう一つの研究系列である社会主義論ではっきりと示されます。この研究は，ロック以来の所有論や平田清明版「市民社会」論をめぐる議論を検討し，同時に協同組合の歴史・現状と理論をふまえ，協同組合社会主義としてマルクス社会主義論を組み立てるところまで到達しました。それは単なるヴィジョンではなく，現実の運動をにらんだ移行論として構想されています。すなわち，先生の議論には，いま現実に起こっていることを望ましい未来構築に向けてどう位置づけ，導くのか，という実践的観点がたしかに在る，ということです。環境問題の深刻化やベルリンの壁崩壊以降の世界の変化を主体的に受け止められた先生は，一方で人間と自然の物質代謝から社会システムのあり方を再考し，他方でキューバの農業協同組合やバスクのモンドラゴンの動きにまで注目しつつ，人間の望ましい社会の招来に資する研究を続けておられます。

大学院で小松先生の指導を受けた院生諸君は，きっと，まずはその博識に驚き，萎縮し，最後には良き師に出会えた，と喜んだことでありましょう。熱心なご指導をいただきましたことに感謝いたしますとともに，これからもご鞭撻くださいますよう。

小松先生には調べたいこと，言いたいこと，考えてみたいことが，まだまだあると思います。世界的金融・経済危機や国内の不況深刻化・雇用不安，格差拡大など目のなせぬ状況の中，研究意欲をますます強くされておられることでしょう。大好きな日本酒を少しだけ控えて健康に留意され，ご活躍を続けられることをお祈りいたします。

2009年1月

経済学部長 小林 純